國學院大學学術情報リポジトリ

山上憶良晩年の三部作における〈言志〉：「沈痾自哀文」「悲歎俗道假合即離易去難留詩一首并序」「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」における自己

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 靖彦, Ogawa, Yasuhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000049

山上憶良晩年の三部作における〈言志〉

―「沈痾自哀文」「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」における自己―

小川靖彦

一、憶良の〈言志〉

強い思想性と社会性を具え、『萬葉集』の中でも異彩を放つ山上憶良の文学が、中国古典詩の伝統である「詩言志（詩は志を言ふ）」の精神を受け継ぐものであることを、私は先の論文「山上憶良と〈言志〉」[1]で論じた。

従来の萬葉集研究においても憶良の文学は「述志の文学」または「言志の文学」と捉えられている。しかし、その際に「志」の意味するところを、知性的で政治的道徳的なものに限定したために、必ずしも憶良の文学の本質を押さえるものとはなっていなかった。

「詩者志之所也（詩は志の之く所なり）」と、「詩言志」を文学理論として明確に打ち出した漢代の「毛詩大序」における「志」は知性的目的意識的な精神をさすが、一方ではそれが感情や情動も含むことを言い、他方では「詩言志」が政治的道徳的効用を持つことを説いているように、その「志」には幅がある。「詩言志」の理念は中国文学史において、この幅の間を揺れ動いてゆく。

大上正美氏は「志」を、「心があるべき方向に向かわんとす

る精神」、すなわち能動的な情動を基礎に置いた知性的目的意識的な精神と広く捉えて（広義の「志」）、その一部として、政治的道徳的な目的意識を持った心の表明（狭義の「志」）があると整理した。そして、多くの詩が時代とともに狭義の「志」に依拠して、政治性道徳性を強め体制を追認するものとなっていったのに対して、苛酷な情況や、人間存在の有限性という絶対的な事実に挫かれながらも、それから目をそらさず、しかも本来的に〝かく生きたい〟と願い、それを文学の場で問い続けるという、広義の「志」に基づく「詩言志」本来の精神が曹植・阮籍・嵇康・陶淵明らに受け継がれていったことを浮かび上がらせた。[2]

私は大上氏の見解に従い、広義の「志」に基づく「詩言志」を、〈言志〉と表記した。貧窮や病苦という苛酷な情況、老いと死という絶対的事実を真正面から見つめながら、〝かく生きたい〟と願い続けた憶良の文学は、まさに〈言志〉の文学と言うことができる。

もちろん政治的社会的に厳しい立場に追い込まれた中で〈言志〉の精神を貫いた曹植らと異なり、憶良は忠良な律令官人として生涯を全うした。それだけに律令官人、あるいは「人間と文化と道義に対する責任者」たる「士人」[3]としての自覚が強く前面に出た作品においては、「志」は政治的道徳的な目的意識を持った心の表明（狭義の「志」）となっている。しかし、その根底には〝かく生きたい〟という〈言志〉の精神が常に存在していると見られる。

大上氏によれば、〈言志〉の中核には「対自性」（「かくある自己とかくあるべき自己を表現の場で問うこと」[4]）がある。憶良の作品の殆どは、⑴実際に歌を贈る相手を想定した、または⑵作中で他者の心を想像した対他的な作品である。その中にあって、最晩年の天平五年（七三三）六月三日作の「沈痾自哀文」「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」（5・八九七～九〇三）の三篇は、他者に謹上することを想定せず、自己と正面から向き合い、憶良の〈言志〉が直接的な形で果たされた作品として注目される。

従来の萬葉集研究において、憶良の文学の「述志性」「言志性」を考察する際に、顧慮されることが少なかった[5]これらの三篇にむしろ、憶良の〈言志〉、また憶良の文学における対自性と対他性の独自な関わり方を考察する手がかりがあると思われる。

以上が先の論文「山上憶良と〈言志〉」の骨子である（詳細はこの論文を参照されたい）。本論はこの問題意識に立って、

三篇の作品それぞれの文体と自己のあり方に注目して、憶良の〈言志〉の構造を明らかにすることをめざすものである。

二、天平五年の作品群についての研究史上の問題点

三篇の作品の題・題詞と左注は以下のような特異な形式となっている。

沈痾自哀文　　山上憶良作

悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序

老身重病經年辛苦及思兒等歌七首長一首短六首

天平五年六月丙申朔三日戊戌作

作者名が「沈痾自哀文」の題の下にのみ記され、また制作年次を記す左注が「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」の後にのみ置かれていることは『萬葉集』に他に例を見ず、三篇の一体性を強く窺わせる。萬葉集研究においては、この形式的特徴に加え、三篇のテーマが一貫したものであることから、これらを一体の作品と捉えることが共通理解となっている。

しかし、一体と捉えながらも、三篇に組織的な関連を見ることについては消極的である。三篇を初めて「連作」と把握したのは伊藤博氏であるが、その際に三篇の関係については具体的説明がなされていない。[5] 後年の『萬葉集釈注』で、「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」には「沈痾自哀文」よりも「思索の深まりが感じられ」[6]、また「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」は「前の漢詩文の思索をくぐり抜けているので、振動が激しい」[7]と述べていることによれば、三篇が書き継がれてゆく中での思索の深化や感情の展開を見ようとしていることが窺える。

さらに中西進氏は、三篇は綜合的な意図の上になるように見えるもののそれは無意識の結果であると、三篇の組織的関連性を強く否定した。中西氏は三篇を「連続的な心情の中で作られた」ものと捉え、「沈痾自哀文」を詠嘆に終始するエチュード、「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」はその未整理な嗟嘆を明晰な論理の力によって払拭した憶良の文学の到達点、そして「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」はその残喘のような呼吸の中で詠まれたものと説明した。[8] この中西氏の説以後、三篇についての議論は概ね、三篇の順序に心情の連続的展開を認めることを前提に、「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」と「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」のどちらを憶良の到達

点と見るかが焦点となっている。[9]

しかし、三篇の順序をそのまま憶良の心情の展開のプロセスと見てよいのであろうか。言い換えれば、三篇をその順序に即して〝憶良の内面の物語〟として読み込んでよいのであろうか。

神亀五年（七二八）に漢文・漢詩・やまと歌（5・七九四～七九九）という三つの異なる文体による作品群を一体として、大伴旅人の妻への哀悼を多面的に表現した憶良からすれば、「沈痾自哀文」を執筆する時点で、既にやまと歌の制作は当然視野に入れていたことであろう。

そもそもこの三篇は、私の先の論文「山上憶良と〈言志〉[10]」で論じたように、老いの苦しみや病の重篤化の中で偶然に制作されたものではなく、「七十有四」（「沈痾自哀文」）という年齢になったことを強く意識し、迫りくる死を前に自己と向き合い、「生と死」とは何かを問うべく極めて自覚的に作り上げられたものと考えられる。

作品の制作の日付やその時の年齢を記すことは、中国古典詩において決して自明のことではなく、〈言志〉の詩人が特定の情況下での自己の内部体験を一回限りのものとして記し止めるためのものであった。[11] 憶良が「沈痾自哀文」に「是時年七十有四（この時に年は七十有四）」と自らの年齢を態々具体的に記したのは、孔子の没年齢七十三歳を念頭に置いてのものと思われる。[12] 憶良は生涯の指針としてきた儒教の始祖孔子の没年齢を超えて未踏の世界に入ったことを自覚し、死への不安を痛切に覚えたのであろう。

三篇には死期に対する強い関心が一貫して認められる。

(1)抱朴子曰、人但不知其當死之日、故不憂耳。若誠知、刖劓可得延期者、必將爲之。（抱朴子曰く、「人は但その当に死ぬべき日を知らず、故に憂へざるのみ。若し誠に知り、刖劓して期を延ぶること得べければ、必ず将にこれを為さむとす」といふ。）

（「沈痾自哀文」）

(2)況乎、縱覺始終之恒數、何慮存亡之大期者也。（況や、縱ひ始終の恒数を覚るとも、何ぞ存亡の大期を慮らむ。）

（「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」）

(3)…ことことは　死ななと思へど…

（「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」）

「沈痾自哀文」では、死期を知らずに安穏と日々を送る人間の愚かさ言う『抱朴子』の一節である(1)を引用して、摂生を

怠ってきた我が身を省みる。死期を知ることができれば、それを延ばすためいかなる努力も惜しまなかったのに、という苦い思いをこの引用に託している。

「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」の序の末尾の一文である(2)の解釈は諸説あるが、最新の富原カンナ氏の説によれば、〝ましてや、たとえ人生に始終があるという定めを解き明かしたとしても、死期についてあれこれ案じて何になろうか、その必要はない〟という意味である。実際の死期がいつかについて心を煩わせても仕方がないと、自分自身に強く言い聞かせているのである。[13] その悟り済ましたかのような言い方の裏には、逆に強烈なまでの死期へ関心が横たわっている。

「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」の長歌（5・八九七）の老いと病の苦しさに〝同じことならば死んでしまおう〟という表現(3)は、この世を肯定的に捉え、相聞歌の修辞的な表現を除いて死への願望を歌わない『萬葉集』の中では異例である。これも死期を知ることのできない人間が、極限的情況の中で発したことばに他ならない。死期がわからないからこそ、死への願望がきざしてくるのである。

また、三篇には仏教語が駆使され、仏典に由来する辞句もしばしば見られるものの、仏教の死生観である死後の生、来世の応報に考えを及ぼすことなく、現世の範囲に踏み止まって「生と死」を考えようとしている。東晋以降、中国の知識人たちが仏教の三世輪廻を受容し、来世の応報を信じることを最善の生き方としたことや、[14] これをめぐる儒教と仏教の間の論争について、憶良が知識を持っていた可能性が考えられる。[15] そうであるとするならば、憶良は三篇において、死後を不可知とする儒教の立場を意識的に選び取ったと言える。

孔子の没年齢を超えた未知の領域で、自らの死期を強く意識しながら、あくまでも現世の範囲内で、「生と死」とは何かを極限まで意志的に追究しようとしたのが三篇なのである。

三、「沈痾自哀文」の自己意識

三篇はいずれも直接的に自己と向き合った作品であるが、それぞれで自己のあり方が大きく異なっている。それらは互いに齟齬するようにも見える。また、逆にそれぞれを独立したものとして読むと、自己のあり方には何かしら充足しないものを感じさせる。この齟齬感と不充足感が、従来の研究において、三篇に憶良の心情のプロセス、すなわち〝憶良の内面の物語〟を読み込ませてきたのであろう。

しかし、このような自己のあり方は、漢文、序と漢詩、やまと歌という異なる文体の可能性と限界を秤量しながら、意図的に選び取られたものであったと思われる。

まず、「沈痾自哀文」の自己のあり方について見てみたい。「沈痾自哀文」は本文が六五七字、そして本文の所々に合計五五五字にも及ぶ自注が書き加えられた大規模な漢文である。その内容は次のように七段に分けられる（「新日本古典文学大系」に拠る）。

(1)竊以、朝夕佃食山野者、猶無災害、而得度世。…〔自分がなぜ重い病に罹らなければならないのか〕

(2)初沈痾已來、年月稍多。…〔老いに病を加え、思うように身体が動かない〕

(3)吾以身已穿俗、心亦累塵、欲知禍之所伏、…〔名医を得て治療を受けたいがそれもかなわない〕

(4)命根既盡、終其天年、尚爲哀。…〔寿命の半ばで死に、若くして病に罹るほど悲しいことはない〕

(5)帛公略説曰、伏思自勵、以斯長生…〔生命ほど貴重で重大なものはない〕

(6)惟以、人無賢愚、世無古今、咸悉嗟歎。…〔全ての人が時の流れを嘆いてきた〕

(7)若夫群生品類、莫不皆以有盡之身、並求無窮之命。…〔長生きできないとするならば、せめて病を取り除いてほしい〕

(1)から(4)で病の苦しみを嘆き、(5)(6)で生命の貴さと、無窮の命を得ることのできぬ人間の哀しみを述べ、(7)で長生が叶わないのならば、せめて今すぐ病を取り除いてほしいと訴える、という構成となっている。

「沈痾自哀文」の表現の特徴は、「我」「吾」という一人称を多用して（7箇所）、病の苦しみを悲嘆するところにある。冒頭の(1)では日々殺生の罪を犯しても生涯を無事に終える者と自分を引き比べて、次のように嘆く（傍線は引用者、注は一行書とする、以下同）。

況乎、我從胎生、迄于今日、自有修善之志、曾無作悪之心。謂聞諸悪莫作、諸善奉行之敎也。所以、禮拜三寶、無日不勤、毎日誦經、發露懺悔也。敬重百神、鮮夜有闕。謂敬拜天地諸神等也。嗟乎媿哉。我犯何罪、遭此重疾。謂未知過去所造之罪、若是現前所犯之過。無犯罪過、何獲此病乎。（況や、我胎生より今日に迄るまで、自ら修善の志ありて、曾て作悪の心なきや。〔諸悪莫作、諸善奉

行の教へを聞くことを謂ふ。〕所以に三宝を礼拝して、日として勤めずといふことなく、〔日毎に経を誦し、発露懺悔す。〕百神を敬重して、夜として闕くることあること鮮し。〔天地の諸の神等を敬拝することを謂ふ。〕嗟乎媿しきかも、我何の罪を犯してか、この重疾に遭へる。〔未だ過去に造りし所の罪か、若しくはこれ現前に犯す所の過ちなるか知らざるを謂ふ。罪過を犯すことなくして、何ぞこの病を獲むや。〕

生まれてこのかた修善の志を持ち、三宝・百神を礼拝敬重してきた「我」がなぜ重い病に罹らなければならないのかと述べる。他者と自分とを区別する意識、そして善行を積んできた自分への自負とそれにもかかわらず病に罹ったことゆえの、自負への裏返しとしての羞恥が、「我」という一人称を押し出している。

「沈痾自哀文」の自己はその冒頭において強烈な自己意識として登場するのである。それゆえ、続く(2)では自分の病苦がいかに辛いかを誇張も交えて詳細に記し、(3)では治療のために尽くしてきてた空しい努力を並べ立てる。

「沈痾自哀文」の(5)(6)では人間にとって生命がいかに貴いものかを述べ、(7)を「若夫群生品類、莫不皆以有盡之身、並求無窮之命（若しそれ群生品類、皆尽くることある身を以て、並びに窮まりなき命を求めずといふことなし）」と書き出し、人間、さらには生きとし生けるものについての生と死についての普遍的な議論に踏み出しながら、結局その生きとし生けるものの中でも、自分こそが最も不幸だという結論に行き着くのである。

今吾爲病見惱、不得臥坐。向東向西、莫知所爲。無福至甚、惣集于我。人願天從。如有實者、仰願、頓除此病、頼得如平。（今吾病のために悩まされて、臥坐すること得ず。東に向かひ西に向かひて、為すところを知ることなし。福なきことの至りて甚だしく、惣て我に集まる。「人願へば天従ふ」といふ。如し実あれば、仰ぎて願はくは、頓にこの病を除きて、頼りて平の如くなること得むと。）

長生を得られることが最善であるが、それが得られない場合には病のないことが幸いなのに、病で身動きさえできぬ自分には全ての不幸が集まっていると言う。

このように「沈痾自哀文」の自己には強烈な自己意識が認められる。そして、中西進氏は右の(7)の末尾の文章について「憶良の生身の人間性」を見たが[16]、「沈痾自哀文」の自己は、あくまでも憶良その人の個人史と身体と密着していると言える[17]。

さらに「沈痾自哀文」では、自己が救い主に訴えかけるという形をとっていることに注目したい。(3)の末尾の

若逢聖醫神藥者、仰願、割刳五藏、抄探百病、尋達膏肓之隩處、肓鬲也。心下爲膏。攻之不可、達之不及、藥不至焉。欲顯二豎之逃匿。謂晉景公疾、秦醫緩視而還者、可謂爲鬼所殺也。（若し聖医神薬に逢はば、仰ぎて願はくは、五蔵を割刳して、百病を抄探し、膏肓の隩所に尋ね達り、〔膏は鬲なり。心の下を膏と為す。これを攻むるも可ならず。これを達すも及ばず。薬も至らず。〕二豎の逃れ匿れたるを顕はさむと欲ふ。〔晉の景公の疾みて、秦の医緩の視れども還りしことを謂ふ。鬼の為に殺さると謂ふべし。〕）

や(7)の末尾の「人願天從。如有實者、仰願、頓除此病、賴得如平」はもちろん、(1)の「嗟乎媿哉。我犯何罪、遭此重疾」も不条理を救い主に訴えた言葉と受け取ることができる。

辰巳正明氏は、「懺悔」を述べた沈約「捨身願疏」や蕭子良『浄住子浄行法門』などとの比較によって、自分の罪を深く懺悔し、長命を願う「沈痾自哀文」が「懺悔文」としての意味を持つと捉え、[18] 東茂美氏は、「沈痾自哀文」の基調は六朝文の一つである「懺悔文」の類に拠ると推測した。[19]

「沈痾自哀文」が「懺悔文」に学んだ可能性はあり得る。しかし、「懺悔文」が仏に対する絶対的な帰依を表白するのに対して、「沈痾自哀文」は救い主を全面的に信じているわけではない。(3)の末尾の「仰願」は、「若逢聖醫神藥者」という仮定の上でのことであり、さらに自注ではその願いを過去の名医さえも叶えられなかったことを言う。(7)の末尾の「仰願」も、やはり「如有實者」という仮定の上でのことである。(1)の「嗟乎媿哉。我犯何罪、遭此重疾」にしても、あたかも救い主に食って掛かるかのような気息である。

憶良は救い主に訴えかける文体によって、救い主への絶対的帰依を誓うというより、むしろ自己の嘆きを増幅しているのである。

このように他者を想定することで自己の嘆きを増幅することは自注にも見られる。例えば、(2)の次の自注である。

四支不動、百節皆疼、身體太重、猶負鈞石。廿四銖爲一兩、十六兩爲一斤、卅斤爲一鈞、四鈞爲一石、合一百廿斤也。（四支動かず、百節皆疼き、身体太だ重きこと、猶し鈞石を負ふがごとし。〔二十四銖を一両と為し、十六両を一斤と為し、三十斤を一鈞と為し、四鈞を一石と為す。合せて一百二十斤なり。〕）

身体の重いことが、鈞石を背負うようだと言い、自注でその重さについて細かく説明する。自分の覚えとして記したというよりは、他者に身体の重い感覚を生々しく伝えるための説明であろう。しかしながら、当時の知識人である律令官人を読者として具体的に想定していたとは考えにくい。当然度量衡の知識を持っていた律令官人に対してここまで初歩的な説明は不要である。この自注は具体的読者を想定してのものというより、他者に説明するという構えによって、自己の苦しみを言い尽くそうとしたものと思われる[20]。

「沈痾自哀文」の自己とは強烈な自己意識を持った、生身の憶良である。そして、自己の嘆きを即自的に吐露するのではなく、他者に訴えかけ、説明するという構えによってそれを増幅しながら表現しているのである。

四、「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首并序」における他者に開かれた自己

次に「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首并序（俗道の仮に合ひて即ち離れ、去り易く留まり難きことを悲歎する詩一首序を并せたり）」の自己のあり方について検討したい（ABCDは引用者）。

悲歎俗道假合卽離、易去難留詩一首并序

A竊以、釋慈之示教、謂釋氏慈氏。先開三歸、謂歸依佛法僧。五戒而化法界、謂一不殺生、二不偸盜、三不邪婬、四不妄語、五不飲酒也。周孔之垂訓、前張三綱、謂君臣父子夫婦、五敎以濟邦國。謂父義、母慈、兄友、弟順、子孝。故知、引導雖二、得悟惟一也。

B但以、世無恒質、所以陵谷更變、人無定期、所以壽夭不同。擊目之間、百齡已盡、申臂之頃、千代亦空。旦作席上之主、夕爲泉下之客。白馬走來、黃泉何及。隴上青松、空懸信劍、野中白楊、但吹悲風。是知、世俗本無隱遁之室、原野唯有長夜之墓、先聖已去、後賢不留。如有贖而可免者、古人誰無價金乎。未聞獨存遂見世終者。所以、維摩大士、疾玉體于方丈、釋迦能仁、掩金容于雙樹。

C內教曰、不欲黑闇之後來、莫入德天之先至。德天者生也。黑闇者死也。故知、生必有死、死若不欲、不如不生。

D況乎、縱覺始終之恒數、何慮存亡之大期者也。

俗道變化猶擊目　人事經紀如申臂
空與浮雲行大虛　心力共盡無所寄

（A竊に以みるに、釈慈の教を示すや〔釈氏と慈氏とを謂ふ。〕、先に三

帰を開き〔仏法僧に帰依するを謂ふ。〕、五戒にして法界を化し〔一に不殺生、二に不偸盗、三に不邪婬、四に不妄語、五に不飲酒を謂ふ〕、周孔の訓を垂るるや、前に三綱を張り〔君臣・父子・夫婦を謂ふ。〕、五教以て邦国を済ふ〔父は義、母は慈、兄は友、弟は順、子は孝なることを謂ふ。〕。故に知る、引導は二つなりと雖も、悟りを得ることは唯一つなることを。Bただし世に恒の質無く、所以に陵と谷と更に変はり、人に定まれる期無く、所以に寿と夭と同じからず。撃目の間に、百齢已に尽き、申臂の頃に、千代も亦空し。旦に席上の主と作るも、夕に泉下の客と為る。白馬走り来たるも、黄泉に何ぞ及ばむ。隴上の青松は、空しく信剣を懸け、野中の白楊は、但悲風に吹かるるのみ。是に知る、世俗には本より隠遁の室なく、原野には唯長夜の台のみあることを。先聖已に去り、後賢も留まらず。如し瞶ひて免かるべきことあらば、古人誰か価の金なしとせむや。未だ独り存して遂に世の終はりを見し者を聞かず。所以に、維摩大士も、玉体を方丈に疾ましめ、釈迦能仁も、金容を双樹に掩ひたまふ。C内教に曰く、「黒闇の後に来ることを欲はずは、徳天の先に至るを入るることなかれ」といふ〔徳天とは生なり。黒闇とは死なり。〕。故に知る、生まるれば必ず死ぬることあり、死を若し欲はずは、生まれざるに如かずといふことを。D況や、縦ひ始終の恒数を覚るとも、何ぞ存亡の大期を慮らむ。

俗道の変化すること撃目のごとく、人事の経紀すること申臂のごとし。空しく浮雲とともに大虚を行き、心力共に尽きて寄る所なし。）

「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」では、憶良は全てのものが死を免れないことについて思いを巡らしている。長大な序は四つの部分に分けることができる。Aでは仏教と儒教は手段は異なってもこの世をよりよく生きるという目標は同じであることを述べ、Bではその仏教と儒教も、この世のものは全て死を免れぬという定めをどうしても解決できないことを指摘し、Cでは〝生と死は一体である〟という『大般涅槃経』聖行品の説を極端に推し進めて、死を恐れるならば生まれなければよいという結論を導き出し、Dでは結局死期についてあれこれ悩んでも仕方がないと慨嘆する。そして、七言古詩で死を免れぬ絶望感を詠む。

「沈痾自哀文」と異なり「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」には「我」「吾」という一人称は一切現れない。もちろんこの序と詩に憶良の自己が存在していないということではない。序の「竊以」という書き出し方は、六朝文の「懺悔文」にも見え、[21]「沈痾自哀文」の採るところであった。「懺悔文」の場合は、仏に対して遜る気持ちを示す。[22]「竊以」やこれに類する表現は、『広弘明集』によれば、「懺悔文」だけでなく、皇帝に

対して自分の見解を開陳する初唐の文章にもしばしば見ることができる（巻第二十五）。「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」の場合、憶良が謙遜している相手を具体的に考えることは困難であるが、憶良が身を引いて、自分の独自の見解を打ち出そうとしている姿勢を読み取ることはできる。

初唐の文章では仏教と道教の関係の問題などをあくまでも論理的に議論しようとする。憶良もそのような立場に立って、「生と死」についての考察を深めようとしたのである。それゆえに、強烈な自己意識を持った生身の憶良は直接的には現れず、「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」の自己は抽象的でやや冷たい印象を与える。

しかし、憶良が議論を多岐に亙らせずに、この世のものは全て死を免れないという一点に絞り込んでいることに注目したい。「沈痾自哀文」では病に苦しむ自己をこの世で最も不幸な者としたが、その背後には他者と自分を区別する意識が働いていた。これに対して、「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」では自己を死の定めを免れないこの世の存在、死の定めをこの世のもの全てと共有する存在として明確に定位している。「沈痾自哀文」に「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」を重ねると、身勝手な思い込みとも見えかねない生身の憶良の苦しみが、この世のもの全ての普遍的な苦しみと捉え直されることになる。

一方、「沈痾自哀文」の存在は、「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」の抽象的な議論の裏に激しい情動を感じさせる。

序で憶良が得た結論は、Cの「生必有死、死若不欲、不如不生（生まるれば必ず死ぬることあり、死を若し欲はずは、生まれざるに如かず）」という極端なものである。この結論は『大般涅槃経』聖行品の「不欲黑闇之後來、莫入德天之先至（黒闇の後に来ることを欲はずは、徳天の先に至るを入るることなかれ）」から導き出されたものである。しかし、富原カンナ氏も指摘しているように、このように述べた『大般涅槃経』は、生・老・病・死をともに受け入れ、生にも死にもこだわってはならないことを説いており、憶良は経典の趣旨とは全く逆の方向へと振れるのである。[23]

死を恐れるならば生まれなければよいという結論はニヒリスティックで、深い絶望感に満ちている。しかし、即物的な「沈痾自哀文」を重ね合わせるならば、この極端な結論が生に対する激しい執着によるものであることが生々しく了解される。

「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」を貫く深い絶望感・無力感の裏側には、それと等量の生への強烈な愛着があることを「沈痾自哀文」は明かしている。

五、「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」における現実の概念化

「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」では、さらに「沈痾自哀文」とも「悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序」とも異なる自己が現れる（本文は訓読文のみ引用）。

老身に病を重ね、年を経て辛苦み、児等を思ふに及ぶ歌七首長一首短六首

たまきはる　うちの限りは　瞻浮州の人の寿一百二十年なることを謂ふ　平らけく　安くもあらむを　事も無く　喪無くもあらむを　世の中の　憂けく辛けく　いとのきて　痛き瘡には　辛塩を　注くちふがごとく　ますますも　重き馬荷に表荷打つと　いふことのごと　老いにてある　我が身の上に　病をと　加へてあれば　昼はも　嘆かひ暮らし　夜はも　息づき明かし　年長く　病みし渡れば　月累ね　憂へ吟ひ　ことことは　死ななと思へど　五月蠅なす　騒く児どもを　打棄てては　死には知らず　見つつあれば　心は燃えぬ　かにかくに　思い煩ひ　音のみし泣かゆ

（5・八九七）

反歌

慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の音のみし泣かゆ

（5・八九八）

すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど此らに障りぬ

（5・八九九）

富人の家の子どもの着る身なみ腐し捨つらむ絁綿らはも

（5・九〇〇）

荒栲の布衣をだに着せがてにかくや嘆かむせむすべをなみ

（5・九〇一）

水沫なすもろき命も栲縄の千尋にもがと願ひ暮らしつ

（5・九〇二）

倭文たまき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも

（5・九〇三）

「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」は長歌では、平安に生きたいという願いが、老いに病も加わり叶わないことを嘆き、あまりの苦しさに死を思うが子を置いては死ねず泣くしかないことを歌い、反歌では貧しさゆえに子に満足に着る物も与えられないことを悲憤し、永遠の命を願う。願望からそれを拒否す

る現実へ、その現実からさらに強い願望へという螺旋的構成がとられている。

このように「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」では、憶良は生きることの根源を明らかにしつつ、生の願望を改めて強く打ち出している。しかし、生身の憶良の嘆きと願望をそのまま歌っているわけではない。確かに、「老いにてある　我が身の上に　病をと　加へてあれば」という表現は、「我（あ）」という一人称を伴いながら、「沈痾自哀文」の老いと病の苦しみを思い起こさせるものである。とはいえ、「沈痾自哀文」のようにそれを即物的に詳しく記すことはなく、この「我」にしても必ずしも他者と区別される自己を強く主張するものではない。そして、一人称の「我」「吾」はここだけに限られる。

そもそも致事したとはいえ従五位下の位階を有していた憶良にはそれにふさわしい位田八町と位分資人二十人と、年一回の位録（絁四疋、綿四屯、布二十九端、庸布百八十常）が支給されており、現実的には子に粗末な布の衣さえ着せてやれないほどに貧しかった（第四反歌）とは考えられない。[21] また、七十四歳の憶良に「五月蠅なす騒く」（長歌）ような幼子が実際にいたことも考えにくい。

憶良は生身の自己をそのまま詠むのではなく、それを憶良の考える普遍的人間像に概念化して表現しているように思われる。

神亀五年（七二八）に完成した「思子等歌一首幷序」（5・八〇二、八〇三）において、憶良は幼子に対して自然と湧き上がってくる慈しみの心を、有限なこの世を生きる人間の本性と捉えていた。「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」で憶良が表現しようとしたものも、病の苦しみの中にあっても、なお子のために生きたいと願うような人間の本性なのではなかろうか。

そして、憶良の場合その慈しみの心は、感情的に子をいとおしむだけでなく、「思子等歌一首幷序」において高価な瓜や栗を子にも食べさせたいと思ったように、具体的な物を通して表現されるものであった。「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」ではその物は着物である。この歌の自己は、粗末な布の衣さえ満足に子に与えられない貧しい存在とされている。

これほどまでに自己を貧しい者としたのは、中国における、「士人」には常に貧しさがつきまとうという考え方によるのであろう。この考え方は『論語』の「在陳絶糧、従者病莫能興、子路慍見曰、君子亦有窮乎、子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣。（陳に在（い）して糧を絶つ。従者病みて能く興つことなし。子路慍（いか）りて見（まみ）えて曰（いは）く、君子も亦た窮することあるか。子の曰（のたまは）く、君子固（もと）より窮す。小人窮す

れば斯に濫る。」（衛霊公第十五）に始まり、「貧者士之常也（貧は士の常なり）」（『列子』）と公式化され、陶淵明らはこの考え方を支えに貧しさに耐えた。憶良は自己にこのような「士人」像を与えるために、実際以上に貧しさを強調したのであろう。[25]

また、「貧窮問答歌一首幷短歌」（5・八九二～八九三）の長歌の後半で、困窮した民の暮らしを描くのに、海松のように破れた布肩衣、倒れかけた家、煙を立てないかまど、蜘蛛の巣のかかった甑など、存在していても無いに等しいものを取り上げたことに表れているように、憶良にとっての貧しさとは単に物がないことではなく、物が本来の役割を果たさないことである。それをさらに広げると、本来あってしかるべきものがないことである。「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」でも憶良の考える貧しさを表現するために、あってしかるべき着物がないことを言ったと思われる。

ところで、「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」の自己は、「士人」としての誇りを持って貧しさに耐えようとした陶淵明らとは異なり、高級な絁綿を無駄に腐らせている「富人」[26]への羨望を言う（第三反歌）。その羨望は、窪田空穂氏が「云つてゐることは、我が児を標準にして富人の子を羨んでゐる如くに見えるが、心としては羨みではなく、『貧窮問答』の極貧者の心と同じく、一種の憤りを云つたものであらう」[27]（『萬葉集評釈』）と読み取ったように、その内実はむしろ憤りであり、それは困窮する民の心と変わらない。

「士人」を志向しつつも、この世の苦――仏教では、生・老・病・死に加え、貧窮困苦も人身を受けた者が被らなくてはならぬ苦とされた（『法華経』譬喩品など）――を、「士人」としての覚悟からも仏教的な悟りからも遠いところで、愚かしく嘆き悲しみ、それにもかかわらず子を慈しむという人間の本然の心によって、生きたいという願望を改めて肯定してゆく人間像が、「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」の自己である。それは憶良を含めた、この世を生きる人間の姿に他ならない。

以上のように、憶良最晩年の三篇の作品は、それぞれに異なる自己のあり方を見せる。そして、それらが重なることによって、迫りくる死を前にした苦しみは、あくまでも憶良その人の個人史と身体に深く根差した具体的なものとして、同時に死を免れぬこの世の全てのものが運命的に背負わされている普遍的なものとして、さらにこの世を惑いながら生きる人間存在の根源にあるものを照らし出すものとして差し出されることになるのである。

容易には捉え難い「生と死」とは何かを、個別の身体、普遍

的な思考、人間存在としての心のあり方という異なる角度から立体的に描き出そうとしたのが三篇一群であり、真に憶良の「遺稿」と言うにふさわしい渾身の作品であったのである。

注

（1）小川靖彦「山上憶良と〈言志〉」『青山語文』第43号、二〇一三―三。

（2）大上正美氏『中国古典詩歌聚花　思索と詠懐』「解説」（尚学図書、一九八五）〈a〉、『六朝文学が要請する視座―曹植・陶淵明・庾信』（Ⅱ二・言志の文学―陶淵明詩の自己把握について、研文出版、二〇一二）〈b〉など。

（3）吉川幸次郎氏「中国の知識人」『増補吉川幸次郎全集』第二巻、筑摩書房、一九八三。

（4）大上氏注（2）書a（「解説」、八頁）。

（5）伊藤博氏『萬葉集の歌人と作品 下』第八章第五節・貧窮問答歌の成立、塙書房、一九七五（初出＝『専修国文』第6号、一九六九―九）。

（6）伊藤博氏『萬葉集釈注 三』、二三七頁、集英社、一九九六。

（7）伊藤氏注（6）書、二四〇頁。

（8）中西進氏「沈痾自哀文」「俗道悲歎の詩」「老身重病の歌」『中西進万葉論集』第八巻〈山上憶良〉、講談社、一九九六（初出＝「悲歎俗道仮合即離易去難留詩」『文学』第39巻第9号、一九七一―九、「老身重病経年辛苦及思児等歌」『論集上代文学』第二冊、一九七一―一一、また以上の二論文と未発表の「沈痾自哀文」を『山上憶良』〈河出書房新社、一九七三〉に収録）。

（9）その後の研究では三篇を連続するものと捉える立場を採るものとしては、「悲歎俗道假合即離易去難留詩一首并序」を憶良文学の究極とする村山出氏「悲歎俗道仮合即離易去難留詩」（『山上憶良の研究』桜楓社、一九七六）、言い残したことを次々と構想して書いていったとする西原能夫氏「沈痾自哀群論考」（『昭和学院短期大学紀要』第20号、一九八四―三）、「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」を同点とする岡内弘子氏「老身重病の歌―憶良文学の到達点―」（『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部』第66号、一九八六―一）などがある。なお、芳賀紀雄氏は、三篇がどのように配列されていても、そこに伺われるのは理と情の間の揺れのみであるという注目される見方を提出している（「理と情――憶良の相剋」『萬葉集における中國文學の受容』、三七二頁、塙書房、二〇〇三）。

（10）小川注（1）論文。

（11）大上正美氏「日付を刻む―陶淵明小論―」『言志と縁情―私の中国古典文学―』創文社、二〇〇四。小川注（1）論文参照。

（12）八世紀の日本で読むことができた『史記』での孔子の没年齢。なお、「七十有四」という年齢の記載と、孔子の没年齢の関係について示唆したものとしては、東茂美氏『山上憶良の研究』（沈痾自哀文論、第五章・過往の〈遊〉、六四五頁、翰林書房、二〇〇六）がある。東氏は孔子の没年齢を七十四歳とし、憶良が厳密に孔子の卒年を知っていたかどうかは疑問が残るが、孔子の「逝水の嘆」が憶良の心をゆさぶり、「沈痾自哀文」で「人無賢愚、世無古今、咸悉嗟歎」と慨嘆させたと捉え、三篇全体の制作動機までは結び付けていない。

（13）富原カンナ氏「悲歎俗道仮合即離易去難留詩一首并序―序の『何慮存亡之大期者也』の解釈を中心に―」『萬葉』第212号、二〇一二―六。「何慮」については、高潤生氏「悲嘆俗道詩文の基礎考察」（西宮一民氏編『上代語と表記』おうふう、二〇〇〇）が同じ解釈を提示している。

（14）安藤信廣・大上正美・堀池信夫編『陶淵明 詩と酒と田園』第二章第二節・運命の在処―楽天の思想（安立典世氏執筆）、東方書店、二〇〇六。

（15）辰巳正明氏『万葉集と中国文学 第二』（五・万葉集と三教思想、笠間

書院、一九九三）、東氏注（12）書（沈痾自哀文論）など。

（16）中西氏注（8）書（「沈痾自哀文」）。

（17）他に「吾以身已穿俗」「吾聞、前代多有良醫」（3）、「我病蓋斯飲食所招」（4）の自注）。これらも自分を強く指し示している。

（18）辰巳氏注（15）書、五・第四章・道理論。

（19）東氏注（12）書、沈痾自哀文論・第一章・輪廻する憶良、五五九～五六三頁。

（20）「沈痾自哀文」の自注については、他者に示すための文芸的なもの（小島憲之氏『上代日本文學と中國文學 中』（第五篇・第六章・山上憶良の述作、一〇〇七頁、塙書房、一九六四）、人間苦を整理し人生を総決算するために自己を含む抽象の人間を意識してのもの（伊藤氏注（6）書、二二七頁）などの見解がある。

（21）東氏注（12）書、沈痾自哀文論・第一章・輪廻する憶良、五六〇頁。

（22）「竊」に「私（ひそか）に」の意味だけでなく、謙遜の意味があることは、康林氏「山上憶良『沈痾自哀文』の訳」（『中京大学文学部紀要』第35巻第2号、二〇〇〇―一二）に拠る。

（23）富原氏注（13）論文。

（24）従五位の給与は『養老令』田令・録令・軍防令による。現実の憶良の給与と、「貧窮問答歌一首并短歌」の長歌前半における貧の意識の関係については、中西氏注（8）書（「貧窮問答」、三八三頁）、井村哲夫氏『萬葉集全注 巻第五』（一九四～一九五頁、有斐閣、一九八四）に言及を見る。

（25）辰巳正明氏『万葉集と中国文学』（四・第三章・貧窮問答歌論、笠間書院、一九八七）、同氏注（15）書（五・第二章・憶良と筑前）に、憶良が「貧窮問答歌」において士の理念としての貧を主題化しているという指摘を見る。

（26）芳賀紀雄氏によれば、この「富人」は具体的には莫大な給与を得ている上級貴族を指している（注（9）書（「貧窮問答の歌―短歌をめぐって―」））。

（27）窪田空穂氏『萬葉集評釈』第四巻、一九〇頁、東京堂出版、一九八四（新訂初版）。

〔付記〕本稿は第29回漢文教育研修会教養講座（全国漢文教育学会主催、二〇一三年七月二十五日、於斯文会館）でのレクチャーの後半を基としている。